

國學院大學学術情報リポジトリ

『アイルランド征服』を読む：
ギラルドゥス・カンブレシスの執筆意図とかわ
らせて(II)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永井, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001035

『アイルランド征服』を読むーギラルドゥス・カン ブレンシスの執筆意図とかかわらせて（Ⅱ）

■ 永 井 一 郎

目次

- I はじめに
- II 史料
- III 内容
- IV 執筆意図ーアイルランド征服の正当化
- V 執筆意図ーヘンリ二世に対する評価（以上、第67巻1号）
- VI 執筆意図ー戦士たちに対する評価（1）（以下、本号）
- VII 執筆意図ー戦士たちに対する評価（2）
- VIII 執筆意図ー第3部の構想
- IX おわりに

Ⅵ 執筆意図—戦士たちに対する評価 (1)

本稿の目的は、ギラルドゥスがその著作『アイルランド征服』でヘンリ二世の第 1 回アイルランド遠征をどのように評価しているか、また、その評価が彼の政治的スタンスとどのようにかかわっているか探索することにある。先行する第 4、第 5 節ではギラルドゥスの征服そのものに対する評価、および、遠征の最高責任者であったヘンリ二世に対する評価について検討した。いずれについても彼はほぼ無条件に称賛しており、この点は前著『アイルランド地誌』の場合と同じである。

本節と次節は検討の対象を遠征の担い手であった戦士たちに移し、ギラルドゥスが彼らをどのように評価しているか探してみる。先行する 2 節の評価をそのまま拡張するならば、王の命令に従ってアイルランドで戦い、大きな戦果を挙げた戦士たちも称賛されるのが自然であろう。しかし、彼の議論はそれほど単純ではない。以下で紹介するように、多くの戦士たちを褒めたたえる一方で、比較的少数ではあるが酷評される戦士たちもいる。戦士たちに関しては両極端の評価が併存しているのである。さらに、後者は遠征が一段落した後で王がアイルランド統治のために送り込んだ腹心たちであるから、彼らに対する非難は任命者である王への批判ともなるわけで、王との関係でいえば、先行する 2 節とは逆の方向性をもつ評価が出されている。なぜギラルドゥスはこのような構成にしたのか、以下関連する記述を紹介しながら検討せる。

利用する記述のひとつは『アイルランド征服』のあちこちに配置されている人物像である。

ギラルドゥスは第 1 回遠征の立役者 10 人を取り上げてその人物像を紹介している。第 1 巻では、第 6 章のレンスター王ダーモット、第 27 章のリチャード・フィッツギルバート、第 43 章のモーリス・フィッツジェラルド、第 46 章のヘンリ二世、第 2 巻では、第 8 章のレイモンド・ル・グロス、第 9 章のメイラー・フィッツメイラー、第 11 章のハーヴェイ・オヴ・モンモランシー、第 16 章のウィリアム・フィッツオルデリン、第 18 章のジョン・ド・コースー、第 22 章のヒュー・ド・レイシーである。この中で 2 人の王を除く戦士 8 人が検討対象となる。各戦士を紹介する形式はほぼ共通しており、心身の特徴、戦士としての能力、戦場での功績などを説明し、その中にギラルドゥスの評価を組み入れている。上で述べたようにこれら 8 人に対する評価が両極端に分かれているのである。

評価の分裂を示すために、ここでは称賛されている者、酷評されている者からそれぞれ 2 人を選び、戦士や統治者としての資質について語る部分を中心に紹介する。

(6-1) リチャード・フィッツギルバートの人物像

「彼は気前がよく、寛大な男である。[行動で]解決できないこと[があれば]、説得力に富む言葉で[問題を]収拾する。」平常時の問題は、自分が命令するより、他人の意見に従って解決しようとする。平和時に彼は軍隊の指揮者よりもむしろ一兵卒のように見えるが、戦闘に際しては、ただの戦士ではなく軍隊指揮者として行動する。彼は部下たちの助言を尊重し、自分の勇気を頼りに自ら先頭に立って戦うことはしない。戦場で彼は戦旗の役割を果たし、部下たちが集散する拠点となる。戦いの最中でも彼はどっしりと構え、形勢のよい時も悪い時も人々の信頼を失わない⁽¹⁾。

(6-2) レイモンド・ド・グロスの人物像

彼は戦場で指揮下の戦士たちに気を配り、夜中でも注意を怠らない。そのため彼の軍隊が不注意な行動や熟慮なく始められた作戦で悲しむといった事態に遭遇することは一度もなかった。彼は謙虚で思慮深く、衣食にこだわらなかった。彼は暑さ、寒さによく耐え、怒りや困難な仕事を乗り越える力量をもっていた。「彼の特徴、気性、美德をまとめて言えば、彼は気前がよく、寛大で、注意深く、思慮に富む人物であった。」彼は戦士としても軍隊指揮者としても称賛された⁽²⁾。

(6-3) ウィリアム・フィッツオルデリンの人物像

彼は気前がよく、礼儀正しい。「しかし、彼が見せる礼儀は常に相手をだまそうとする行為と組み合わされている。『彼は草むらに潜んでいる蛇』なのである。」気前よく寛大な男に見えるが、心の中は好意ではなく悪意に満たされている。大いに尊敬すると言った相手でも、その財産を平気で奪ったり、悪意に満ちた情報を流したりする。彼は戦闘能力のない人々を征服したが、自分に武器を向ける人々にはおもねるばかりだった。自分が統制できない相手には甘く、すでに征服された人々に対しては気ままにふるまった。敵には愛想がよく、自分の部下には抑圧的であった。彼は敵から恐れられず、部下から信頼を得られなかった。「彼は強い金銭欲をもっていただけでなく王宮での[権力獲得]にも野心を抱いていた⁽³⁾。」

(6-4) ヒュー・ド・レイシーの人物像

彼は個人的な事柄に気を配り、公的な事柄でも自分に委ねられた任務を注意深く遂行する。戦闘を熟知しているが、戦略家として成功したわけではない。というのも、彼はしばしば自分が率いた遠征で大きな損害を被っているからである。妻の死後彼は女遍歴を重ねた。「彼は黄金を渴望し、昇進と卓越[した地位]に極端な野望をもっている⁽⁴⁾。」

以上4人の戦士の人物評価を比較すると、前の二人と後の二人で逆になっている。ギラルドゥスはリチャードとレイモンドを、戦士としてのタイプは違うが、ともに戦場の指揮

者にふさわしい勇氣，判断力，寛大さを兼ね備えた人物として描き出し，称えている。それに対して，ウィリアムとヒューに関しては，表・裏があり，自己中心的で貪欲な人間であると決めつけている。

ギラルドゥスはなぜこのように極端な評価をして見せたのか。検討のためにはヘンリ二世の第1回アイルランド遠征の経過を簡単に振り返っておく必要がある。

第1節で紹介したように，故国を追われたレンスター王ダーモットの募集に応じて遠征に参加した戦士たちの多くは，ウェールズに定着していたノルマン戦士たちであった。彼らはロバート・フィッツステイーヴンとリチャード・フィッツギルバートの指揮下で南東アイルランド各地を転戦し，その支配域を拡大していった。遠征はダーモットを支援するようというヘンリ二世の要請から始まったから，形式上遠征軍の最高指揮者は王であったが，王が自ら軍隊を率いたわけではなく，現実の戦いや征服地の統治は遠征軍を直接指揮する戦士たちが担っていた。この意味でアイルランド征服前半期の立役者はウェールズ出身のノルマン戦士たちであった。当然戦果の多くはまず彼らが入手したわけで，彼らは征服地に自らの支配域を作り始めた。なかでもダーモットの娘と結婚し，レンスター王位継承権を獲得していたリチャードは大きな勢力になると予想された。

こうした動きは，アイルランドをイングランド王国に併合しようと目論んでいたヘンリ二世から見れば危険で，阻止すべきことであった。そこで王は，①アイルランド遠征軍の中心にいたりチャードをイングランドに召還する，②自ら軍を率いて南東アイルランド各地を巡行する，③これまで遠征に参加していない戦士たちから自分に忠実な者を選んでアイルランド統治を委ねるという政策をとった。

これを見たウェールズ出身の戦士たちは自分たちの功績を無視されたと考えて，王に不満をもった。

以上はギラルドゥスの記述を追いながらヘンリ二世とウェールズ出身のノルマン戦士たちとの関係を整理したもので，何よりもまずギラルドゥスの理解であるが，ほぼ事実と考えてよい。王が当初は自ら遠征軍を引率せず，征服が進んでイングランド勢力の拠点が各地に築かれた段階になって初めて，それも征服地全域に対する最高位支配者として姿を見せたこと，また，アイルランド在住のイングランド勢力を統率していたリチャード・フィッツギルバートを突然召還し，代わりに腹心をアイルランド総督として送り込んだことは，他の史料から確認できる事実である。こうした動きの中でリチャードらが王に対する不満をもつようになったという点はギラルドゥスの判断であるが，上記3点からして自然な感情であろう。

史料(6-1)～(6-4)からギラルドゥスがウェールズ出身の戦士たちに身を寄せて征服を評価していることは明らかであるが，加えて，次の2つの記述はなぜ彼がこのような

評価をしたのか明確に語っている。

(6-5) ジェラルド一族で若くして戦死した者が少なくない。もし生きながらえていれば、彼らはその高貴な行動によって永久の名声を獲得していたに違いない。

ジェラルド・オヴ・ウィンザーに始まる一族は2つのすばらしい出自、血統を併せもっている。といのも、彼らはトロイの人々から勇敢さを、また、フランス人から武器を操る技を受け継いでいるからである。彼らはその人数と生来の勇気ゆえにいつも疑いの目で見られている。彼らは「妬みが、[すなわち]、彼らのすばらしい武勇を妬む[人々]が、彼らを[勝利の]頂点から底へと[引きずり]降ろさなかったならば、どのような王国でも独力で征服する力をもっていた⁽⁵⁾。」

(6-6) ヘンリ二世はアイルランドの征服地に行政組織を作ることにし、総督にウィリアム・フィッツオルデリンを任命した。また、ウィリアムが任地に到着するまでレイモンド・ル・グロスをその代理人とした。ウィリアムがアイルランドに到着すると、レイモンドは直ちにダブリンをはじめとする都市や城塞を引き渡した。

ウィリアムはレイモンドの率いる精鋭軍を見て、レイモンドが何か陰謀をたくらむのではないかという疑いを持ち、彼を排除する決意を固めた。おそらく王の了解を得てであろうが、ウィリアムは事あるごとにレイモンドとその血統に属する人々を不当に扱った。

レイモンドの一族にとって警戒されるのはいわば運命であった。戦いがあれば彼らはいつも称賛され、最高の地位が与えられた。戦闘のあらゆる局面で彼らの高貴な勇気は最高の名声を得た。しかし、危機が去ると彼らは憎しみの的となり、他の人々の妬みによって後ろへ追いやられ、最低の地位に退けられた。しかし彼らの卓越した高貴さは妬まれても消失することはなかった。彼らはアイルランドに根付いたのであって、今日でもこの一族は大きな影響力をもっている。

「敵の最も奥深い城塞にまで攻め込むのは誰か。ジェラルド一族だ。

故郷を守護するのは誰か。ジェラルド一族だ。

敵が恐れるのは誰か。ジェラルド一族だ。

妬みから中傷されるのは誰か。ジェラルド一族だ。」

もし彼らの卓越した武勇を正当に評価する君主がいたならば、彼らはアイルランドに平和と平穏をもたらしたであろう。しかし、彼らの勇気は常に根拠なき疑いにさらされた⁽⁶⁾。

まず「ジェラルド一族」について説明する必要がある⁽⁷⁾。

一族の名称はヘンリー一世のもとでペンブローク城主となったジェラルド・オヴ・ウィンザー (Gerald of Windsor) に由来し、彼とデハイバース (Deheubarth) 王リース・ア

ブ・テウドゥル (Rhys ap Tewdwr) の娘ネスタ (Nesta) との間に生まれた子供たち、孫たちが中心メンバーである。したがって、この一族は南ウェールズの新旧勢力を代表する血統を引いていることになる。ギラルドゥスがジェラルド・オヴ・ウィンザーの孫にあたること、また、彼が2つの血統を誇りにしていたことはよく知られている。

ギラルドゥスが人物像を描いている8人の戦士のうち、ヘンリ二世がアイルランド総督に任命した2人を除くと、いずれも血統あるいは婚姻によってジェラルドないしネスタにつながっている。すなわち、モーリス・フィッツジェラルドはジェラルドとネスタの子、レイモンド・ル・グロスは孫にあたる。ロバート・フィッツスティーヴンはネスタとカーディガンの城主スティーヴンとの間に生まれた子で、メイラーは彼女とヘンリー一世のひ孫にあたる。リチャード・フィッツギルバート自身は2人の祖と直接の関係をもっていないが、彼の妹がレイモンドと、また、娘がモーリス・フィッツジェラルドの息子と結婚している。同様にハーヴェイ・オヴ・モンモランシーはモーリスの娘と結婚している。

ギラルドゥスは「ジェラルド一族」をこのように婚姻関係まで含めた広い意味で使っていると考えられる。

ロバート・フィッツスティーヴンとリチャード・フィッツギルバートについては人物像とは別にひとつの章が設けられている。

(6-7) ロバート・フィッツスティーヴンは、王や王子たちにどのようにアイルランドを征服すればよいか身をもって示した。ロバートは高貴なアイルランド征服事業の先陣をきった。

リチャード・フィッツギルバートとロバート・フィッツスティーヴンは、少なくともレンスターに関しては、単なる略奪者とみなすべきではない。というのも、両者とも王の許しを得てダーモットの王国奪回を助けたのであり、また、後者は王位継承者としてレンスター対する正当な権利をもっていたからである。しかも、リチャードは彼の妻を通じて得ていた諸権利をヘンリ二世に譲渡し、これを見て他のアイルランドの支配者たちも王に忠誠を誓い、自分たちがもつ権利を王に献上した。事情に疎い人々はリチャードが王に対して正義にもとる行為をしたと言うが、これはまったくの誤りである⁽⁸⁾。

この記述については背景説明が必要である。上記のようにロバートとリチャードはダーモットの要請に応じてアイルランド遠征軍（ダーモットから言えば自国レンスターを奪回するための軍勢）の指揮をとって各地に転戦する中で、レンスターだけではなく、広く南東部地域を占拠した。この勢いを見てヘンリ二世は彼らが占領地に自立的な支配権を確立するのではないかと危惧し、2人が王の許可なしに征服し、領地を獲得したという理由で帰国を命じた。おそらくイングランド王宮には2人を危険視する人々がいたのであろう。

これに対してギラルドゥスは、少なくともレンスターに関しては、2人は正当な権利をもって行動しており、他の地域についてもすぐに王に支配権を献上したのであるから問題ではないと主張している。この主張は事実に照らして正しい。ただし、彼は王の疑念が間違っているとは言っておらず、王の直接批判は避けている。

本節は『アイルランド征服』に登場する主要な戦士たちをギラルドゥスがどのように評価しているか、代表的な記述で紹介した。引き続き次節では、(6-1)～(6-7)に見られる彼の評価をどう理解したらよいか検討を進める。

VII 執筆意図ー戦士たちに対する評価 (2)

なぜギラルドゥスは『アイルランド征服』で「ジェラルド一族」を高く評価する一方、ヘンリ二世が送り込んだ総督たちを酷評したのか。答えは簡単に得られるように見える。一般的に言って、自ら戦ってともかくも安定した支配地域を確立するまでの苦労は、征服後そこへ乗り込んで統治する苦労よりも大きいから、後から来島した総督たちは征服前半期に命をかけて戦った戦士たちの成果を横取りしたとギラルドゥスが考えても不思議ではない。加えて、こちらの方が重要であるが、「ジェラルド一族」は彼と血縁的、地縁的に近い人々であった。彼は生来強い郷土愛をもっていたから、彼らに身を寄せた叙述になるのはむしろ自然である。

しかし、単純な判官びいきや身内びいきが感情を込めた「ジェラルド一族」の賛歌、あるいは、人格否定に近い王の腹心たちへの酷評を生み出すとは考え難い。何か別の目的があって彼はこのような両極端の評価をして見せたのではないかと私は考える。では、その目的とは何か。

本節ではこの疑問の答えを求めて推測を重ねるが、まず探索の前提となる点を確認しておこう。それは、前節で紹介した記述が、(7-1)を除き、すべて『アイルランド征服』の第2部で展開されているという点である。基本的にギラルドゥスは第1部、第2部の順に書き進めているので、同書の執筆時期でいえば後半に集中している。私がこの点に注目するのは、ギラルドゥス自身が第2部序文で、これ以降は書き方を変えると記しているからである。

(7-1) 第1部ではアイルランド遠征の歴史をそのまま叙述し、言及に値する事柄や事件のつながりを書き落とすことのないようにしてきた。しかし、私の時間がキリストの十字架に関して求められている多くの重要な仕事で費やされ、研究のための余裕が

なくなってしまった。そこで、以下では「何事も急いで、短く、また、飾りのない文章で語り続けることにした。後世の人々には[第2部は]歴史叙述というよりも、選ばれた資料のように見えるかもしれない。」このように簡略化するのは、私の余暇が仕事の時間となり、研究は今や好まれなくなり、私の喜びが悲しみになり、私の落ち着いた生活は激しい動揺に変わってしまったからである。

こうした状況であるから、読者は以下の部分に秩序だった叙述や優美な文体を期待しないほしい⁽⁹⁾。

(7-2) 私は十字軍勸奨巡行の準備をする中でこの書を書き上げる努力を重ねた。夜中まで灯りをともし、急ぎに急いだのである。

神が私の生涯についてどのようにお考えか分からないが、私はこの『預言[が示すアイルランド征服]の歴史』を『アイルランド地誌』とともに、私に勤勉さの証として子孫と故国に贈る⁽¹⁰⁾。

本節の議論を始める前に3点について確認しておこう。

第1に、(7-1)の内容は前提とされている点も含めて以下のように整理できる。

- (1) ギラルドゥスは『アイルランド征服』の第1部を当初の構想に従い十分に練った文章で書き終えた。
- (2) 第2部に取りかかる時点で、ギラルドゥスは十字軍勸奨のためカンタベリー大司教ボードウィンを案内してウェールズ各地を巡る任務を命じられ、著述に十分な時間を割くことができなくなった。しかし、多忙を理由にこの著作を未完成のまま放置したくない。
- (3) そこで、第2部は第1部よりも簡潔に叙述することにした。第2部は史料に近いものとなり、構成や文体に未整理の部分が残るであろう。
- (4) ウェールズ巡行中、夜間に筆をとるなど努力を重ねた成果がこの第2部である。
- (5) 『アイルランド征服』は第1、第2部で終わり、その評価は神や子孫に委ねる。

第2に、(7-1)と(7-2)はその内容や表現から判断して違った時期に書かれたと考えられる。前者は第2部の本文が書き始められる前の心づもりを示しており、後者には本文が書き終えられた時の気持ちが表れている。こうした細かい時点を問題にするのは、後に見るように第2部執筆中に、将来の見通しまで含めると、ギラルドゥスの置かれた立場が大きく変化し、それにとまって彼の判断基準も揺れたと推測されるからである。

第3に、第1部の叙述は全体として以下のような特徴をもっている。まず、上述のように本文は大まかに分けて3種類の記述から構成されている。①アイルランド遠征の中で行われた戦闘や付随的事件の記述、②作戦や戦闘で中心的役割を担った戦士たちの人物像、③大きな戦闘の前後に指揮者が行った演説、である。この3種の叙述は多くの場合それぞれ

れ独立の章を立てて行われている。このほかに預言に対する言及が散見されるが、その大部分は①、②の記述の中に組み込まれており、内容も追加的なものにとどまっている⁽¹¹⁾。以上をまとめると、第1部は遠征の過程、人物紹介、演説ないし檄という3種の記述をバランスよく組み合わせ、全体としてアイルランド征服の様子が浮かび上がる構成となっている。ギラルドゥスはこうした構成を基準にして、第2部では記述が短縮され、構成に乱れが残るかもしれないと言っているのである。

以上を踏まえて、第2部は第1部と比べてどのように違っているか検討しよう。

まず、第2部の本文は第1部に比してどれだけ短縮されているだろうか。

第2部の本文はスコットの校訂本で59ページあり、39章に分かれている。第1部の本文はそれぞれ54ページと46章であるから、2つの本文を比較すると分量ではほとんど差がない。ギラルドゥスは圧縮の結果歴史叙述というよりも資料の羅列に近くなると述べているので、そうした記述を探してみると、第31章と第35章が重要な戦闘や事件を2、3行にまとめて年代順に記しており、年表風の資料といってよい。しかし、記述の圧縮が明らかなのはこの2章のみである。しかも、前者に記されているのは1153年～86年の事件で、その大半は第2部が扱うべき時期より前のものである。他方後者には1185年～86年の事件がまとめられており、同書のメインテーマである第1回遠征から時期的に離れている⁽¹²⁾。

逆に第1部本文と同様に紙幅を充分使った記述は第2部にも多数含まれている。実際、39章中25章と、三分の二近くを占めている。これら25章を概観して第1部と違うのは、軍隊指揮者の演説が1回しかなく、基本的に征服のプロセスと主要戦士たちの人物像の組み合わせとなっている点である。さらに、25章の大部分が第2部の前半に置かれ、第1部から第2部へと違和感なく読み進めることができる。

こうした状況を見ると、ギラルドゥスは本当に第2部で記述の短縮を行ったのだろうかという疑問が生じる。マーティンも同様な疑問をもち、ギラルドゥスは第2部の序文を書く前に本文の大部分を仕上げていたのではないかと推測している⁽¹³⁾。しかし、上で指摘したように、時間不足のため第2部の書き方を改めざるを得ないと彼が記したのは、その表現から判断して、本文執筆前と考えるのが自然である。私はむしろ、第2部では記述方法を変えて内容も圧縮するという彼の発言は事実を正確に伝えていないのではないかと考える。

では、第2部で彼は何を換えようとしたのか。この問いに対する答えを得るために、上記のようにパターン化された第1部とは違った内容の記述が第2部にないかどうか探してみると、私の個人的な判断であるが、15の章にそうした記述が含まれている。各章のテーマを以下に挙げる。

第10章：「ジェラルド一族」の称賛。

第15章：「ジェラルド一族」賛歌。

第26章：ヘンリ二世に十字軍参加を要請するエルサレム総大主教ヘラクレスの手紙。

第27章：ヘンリがヘラクレスに送った返書。

第28章：パレスティナ王国陥落の事情。

第29章：西ヨーロッパの支配者たちの対立抗争。

第30章：幻想。

第31章：1153年～86年に発生した重要な事件。

第33章：ロバート・フィッツステイーヴンとリチャード・フィッツギルバートの弁護と称賛。

第34章：王子ジョンがアイルランド遠征で成果を得られなかった理由。

第35章：1185年～86年に発生した重要な事件。

第36章：王子ジョンのアイルランド遠征が成功しなかった理由。

第37章：アイルランドに住む3つの人種とアイルランド征服の難しさ。

第38章：アイルランド人を征服する方法。

第39章：アイルランドを統治する方法。

見られるとおり第2部の後半には雑多といってもよい内容の章が並んでいる。ヘンリ二世の第1回アイルランド遠征をメインテーマとしている『アイルランド征服』にとっていずれも必須の事項ではない。彼はこうしたいわば余分な記述をする時間をもち合わせていたわけで、ここでも時間不足が本当の理由だったのか疑わしくなる。第1部から第2部の三分の二近くまで一貫しているパターン、すなわち、遠征の経過を順次記述するという方法が第2部で変更された理由はほかにあると考えるのが自然であろう。この真の理由はまず間違いなくギラルドゥス自身の判断によるものであり、彼の執筆意図の変化に由来する可能性が高い。

上記15の章でギラルドゥスは何を伝えたかったのか。内容によって3つのグループに分け、それぞれについて彼の執筆意図を推測してみよう。

第1のグループは第26章～第30章で⁽¹⁴⁾、いずれも『アイルランド征服』執筆中に西ヨーロッパで進められていた第3回十字軍遠征の準備にかかわっている。ギラルドゥスも参加を決意し、カンタベリー大司教に随行してウェールズ各地で勧奨している。彼の熱意は、第30章で神が新しく受難している幻想を見て、これは聖地奪回を命じた神意であると解釈している点にもうかがわれる。十字軍参加は、アイルランド征服と直接の関係がなくとも、当時の彼にとって最も重要な問題であったからあえて取り上げて、挿入したので

あろう。

第2のグループは第38、第39章である⁽¹⁵⁾。すでに第4節で細かく紹介してあるので、ここでは章のタイトル「いかにアイルランド人を征服すべきか」、「いかにアイルランドを統治すべきか」を再録しておけばよいであろう。本節にとって重要なのは、この2章が『アイルランド征服』ないし第2部でどのような役割を担っているかである。

まず内容で言えば、遠征のプロセスが語られた後であること、また、その遠征によってアイルランドが完全に制圧されたわけではなく、征服は完遂されていなかったことから判断して、同書のメインテーマを受け継ぎ、将来へ発展させたものと考えてよい。次に、この2章は第2部の末尾に置かれており、序文しか書かれなかった第3部は別として⁽¹⁶⁾、最後の記述である。以上から私は、第38、第39章は『アイルランド征服』の結論部分として構想されたのではないかと考えている。私の推測が当たっているならば、この2章はメインテーマと直接つながっており、雑多な記述とした私の整理は誤っていたことになる。

第3のグループは、第10、第15、第33章⁽¹⁷⁾、すなわち、「ジェラルド一族」を称える記述である。いずれも内容は前節で紹介しているので、ここではギラルドゥスが特にどのような主張をしているか確認するだけでよいであろう。

まず第33章では、ヘンリ二世がロバート・フィッツステイーヴンやリチャード・フィッツギルバートの越権と咎めた行為を紹介し、レンスター王国以外の地域についてはともかく、レンスターに関する王の主張は当たっていないと述べている。王は自分の命令に反する行為をしたとしてリチャードをイングランドに召還し、アイルランド統治組織から排除したのであるが、少なくとも部分的にこの措置は誤りであると言っている。王に対する批判が論拠とともに出されている。

第33章の目的はもうひとつあって、それはロバートやリチャードが優れた統治者であったと強調することである。もし王によって排除されなかったならば、彼らはその能力を充分に発揮してアイルランド南東地域をうまく統治し、イングランド王国に大きな利益をもたらしたはず、と言わんばかりの叙述になっている。

第15章は3つの部分から構成されている。まず、リチャードが召還された後しばらくの間、レイモンドがイングランド軍を預かっていたこと、王が派遣した総督ウィリアム・フィッツオルデリンがアイルランドに到着すると、すぐにレイモンドは預かった軍隊をウィリアムに引き渡したこと、ウィリアムはイングランド軍の中でレイモンドが獲得していた影響力を恐れて、彼を排除しようとしたことが簡潔に記されている。いずれも他の章ですでに紹介されていることである。

次に、突然「ジェラルド一族」の賛歌が始まり、アイルランド征服が成功したのはすべて彼らの勇気と思慮のおかげであるという主張がなされる。文脈から判断して、この「ジ

「ジェラルド一族」の中に血縁関係のないリチャードも含まれていることは間違いない。

最後に、王が「ジェラルド一族」の功績、能力を正當に評価してしかるべき待遇をしていたならば、アイルランドはよりスムーズに征服、統治できたはずであるという主張、および、総督ウィリアムが自らの利益を求めて策略を重ねたことが記されている。

第15章の論理の流れを見ると、ギラルドゥスが第33章以上に明確な形で王の人材起用を批判していることが分かる。王に最大の利益をもたらすアイルランド統治のありかたを念頭に置いて、その実現の可能性があったにもかかわらず、誤った人材起用ゆえに実現せず、アイルランド人勢力との戦闘を長期間続けざるを得なくなった、という批判である。これは単なる身内びいきではない。

第10章も「ジェラルド一族」の称賛で、第1部で登場した主要な戦士たちがいかに優れた戦士たちであったか、改めて述べられている。称賛の繰り返しによって第15章と似た効果を生み出している。

以上の3章、特に第10章、第15章と対比的内容をもつのが前節で内容を紹介した第16章と第22章である⁽¹⁸⁾。王がアイルランド総督に任命したウィリアム・フィッツオルデリンとヒュー・ド・レイシーは統治者の資質を欠き、王国の利益よりも私利を求めたと強い口調で語られている。こうした酷評は彼らに対するギラルドゥスの正直な評価というよりも、むしろ王の誤った人材起用を印象付けるための誇張表現ではなかろうか。

第4のグループは第34章、第36章、第37章で、いずれも、アイルランド征服が十分な成果を上げられないのは王がアイルランド人・社会をよく知っている者の力を活用しないからであると主張している。ただし、そこで取り上げられているのはもっぱら王子ジョンが率いた第2回遠征、あるいは、将来行われるだろう遠征であり、『アイルランド征服』のメインテーマである第1回遠征ではない⁽¹⁹⁾。しかし、こうした記述を繰り返し読む者は自然に第1回遠征を思い浮かべるはずで、ヘンリ二世がアイルランド遠征で採ってきた人材起用を全体として批判していると受け止めるであろう。

以上第2部後半の記述を4つのグループに分けて紹介したが、そこでギラルドゥスがぜひとも読者に伝えたいと考えていたのは何だったのだろうか。私は第3グループの主張であると考える。そう推測する根拠について説明しよう。

ひとつは、第3グループの記述には彼が特に強調している、あるいは、気持を込めていると思われる文章が多く含まれているからである。第15章の「ジェラルド一族」賛歌がその代表である。

もうひとつは、ギラルドゥスが第3グループの叙述を進める中で、リチャード・フィッツギルバートらの受けた処遇と自分のそれとを重ね合わせている可能性が高いと考えるからである。彼はこの当時ヘンリ二世に直接仕えながら、王の自分に対する認識を改めても

らおうと努力を重ねていた。機会を見つけて自分が王の有能かつ忠実な従者であることを示そうとし、そのためには自分がもつメリット、すなわち、ウェールズ人支配者たちとの交渉力を犠牲にする覚悟を固めていた。しかし、王は彼のメリットを利用しながらも、彼に対する疑念、すなわち、ギラルドゥスにその熱望するセント・デイヴィズ司教職を与えると、ウェールズ人支配者たちと結託して自分のウェールズ征服計画を邪魔するのではないかという疑いを捨てなかった。他方、ギラルドゥスは自分がこれほど尽くしているのに、王は、口約束はしても、実際にはまったく報いてくれないという強い不満をもっていたのである⁽²⁰⁾。

この王の態度は、アイルランド遠征において「ジェラルド一族」に与えた処遇と同じであり、ギラルドゥスが許し難いと考えてもおかしくない。ただ、自分の場合と同様に面と向かって主君である王を非難することはできないから、第2部でいろいろな工夫をしたのではなかろうか。工夫のひとつは身内の戦士たちを称え、それとの対比で王の派遣した総督たちを酷評することであり、もうひとつは、アイルランド人・社会をよく知り、特に現地の戦闘に経験のある人材を活用すべきだという主張であった。後者をウェールズに置き換えれば、統治に不可欠な人材はウェールズを熟知した者であり、最適任者はギラルドゥス自身である、そう彼は暗示していると読むことができる。

私の推測が的外れでないとすれば、『アイルランド征服』第2部には遠征に関する歴史的叙述という本来の内容だけではなく、王に対する暗示的な訴え、すなわち、自分に対する疑いや危惧の念を改めてほしいという願望もひとつのテーマになっていたことになる。こうした表面上の主題から離れた記述を入れることが彼の言う第2部における叙述の変更だったのではなかろうか。少なくともギラルドゥスがヘンリ二世の政策を批判する記述を組み入れたために第2部の構成が複雑になり、混乱した印象を与えるようになったことは間違いない。

VIII 執筆意図ー第3部の構想

本節が検討するギラルドゥスの執筆意図は、これまでの4節とは違い、構想されたが実現しなかった意図である。

第2節で紹介したように、『アイルランド征服』の第3部は序文までで中断され、そのまま放置されたため、内容を明確に示す記述は存在していない。しかし、ギラルドゥスが何か具体的な構想、それもひとつの部を立てるほどの構想をもっていたことは間違いない。

それはどのような構想だったのか、また、その構想は第1部、第2部の内容とどのようにかかわっていたのか、さらには、なぜ彼は執筆を中断しそのまま放置したのか。

本節はこうした疑問を解明するためのひとつの試みである。ただ、手掛かりとなる記述は第3部序文と第1、第2部で言及されている預言しかない。そのため、検討作業はこれまで以上に推測の積み重ねとならざるを得ない。

ギラルドゥスは第3部序文で次のように述べている。

(8-1) 第1部と第2部で展開されたアイルランド征服の歴史に続いて、「その歴史[叙述]に権威と預言的洞察を加える作品」が続くのは決して不自然ではない。実際、預言が歴史とともに語られるのは自然であって、アイルランド征服の過程を預言によって説明すれば、読者にとって分かりやすく親しいものとなるであろう。

イングランド王ヘンリ二世からケリドンのマーリン・シルヴェスター (Merlin Silvester) の預言の意味を説明するよう求められたことも、預言を紹介しようという私の気持ちを高めてくれた。私はこの著作が王子リチャードを喜ばせると確信している。

私は以前からウェールズ各地でマーリン・シルヴェスターの預言を記した本を探していたが、容易に発見できなかった。しかし、最近カンタベリー大司教に随行して十字軍勸奨のためウェールズを巡行した際に、グウィネズのセイン (Lleyn) と呼ばれるところで長らく探していた本を見つけることができた。そこで私はウェールズ語をよく知る人の助けを得て、この本に集められている預言の中で表現から判断して古い起源をもつものを選び出し、ラテン語に訳した。こうした準備をしたうえで、私はマーリン・シルヴェスターのものと判断される預言を本書で紹介し、野蛮な言語によって閉ざされた闇から解放しようと考えていた⁽²¹⁾。

(8-2) 「しかし、この[話]はここまでにしよう。」というのも、いろいろ考えてみて、「私は第3部、[すなわち]、預言の新訳[を使った叙述]はしかるべき時が来るまで延期すべきだ」という結論に達したからである。真実は、それが大いに望ましいことであっても、まだ機が熟していない時に危険を冒して発表し、権力をもつ人々を立腹させるよりも、一時期隠しておくほうがより良い[結果をもたらす]」からである⁽²²⁾。

『アイルランド征服』を初めて読む者は、読了直前にこのような記述に遭遇して驚く。自分が今まで読み進めてきたのはヘンリ二世によるアイルランド遠征の歴史であり、マーリンなどの預言は、あちこちで言及されてはいても、全体構成でみれば決して主要な役割を担っているわけではない。予言が中心になるという第3部はたして第1、第2部とうまくつながるのか、預言による歴史とはどのようなものなのか。また、第1部序文でギラルドゥスはこの著作を完成したものとして紹介しているが、未完の第3部はどのような位置づけになるのか。こういった疑問がいくつも浮かんでくる。

現存マニスクリプトから判断して、ギラルドゥスが少なくとも一時期『アイルランド征服』を3部構成にする計画をもっていたことは間違いない。しかし、5年後に発表された『ウェールズ案内』の序文で彼はこの著作を2部構成の本と紹介している⁽²³⁾。彼は第2部を書き終え、第3部を書き始めたところで中断し、その後しばらくして執筆継続をあきらめ、第2部までで完了と決めたのである。

では、ギラルドゥスは第3部でどのような叙述をしようと考えていたのか。これは書かれていないものを推測するという、一般的に言って無理な作業であるが、彼の記述の中に多少の手掛かりは残されており、私は試みる価値があると判断した。手掛かりはこの著作に「預言[が示すアイルランド征服]の歴史」という別名がギラルドゥス自身によって与えられていること、および、第1、第2部でしばしば言及されている預言である。

まず、上記別名からどのような推測が可能だろうか。いろいろなことが考えられるが、最も自然なのはアイルランド征服の歴史を古い預言の実現として叙述する試みであろう。

この推測が当たっているとして、彼はいつ、どのようにして「預言[が示すアイルランド征服]の歴史」という構想を得たのであろうか。史料(8-1)、(8-2)の記述を整理すると、次のプロセスが浮かび上がる。

出発点はヘンリ二世の要請、すなわち、当時アイルランドやウェールズで広く見られた預言伝承についてギラルドゥスに説明を求めたことにあった。ただし、彼自身も預言伝承に関心を寄せていた可能性が高い。王の要請にこたえるために、ギラルドゥスはマーリンの預言の書をおそらくウェールズ内で探したが容易に見つからなかった。これと並行して、ジョン王子に随行したアイルランド遠征が契機となって『アイルランド征服』の構想が生まれ、その第3部に「預言の歴史」を組み入れる計画を立てた。しかし、第3部の中心的資料となる予言の書を手に入れたのは『アイルランド征服』の執筆がかなり進んでから、おそらく、第2部をほぼ書き終えた時点であった。このころのギラルドゥスは執筆の時間を確保するのが難しくなっていた。さらに、入手した預言の書を読み、利用方法や文案を具体的に検討する中で、ギラルドゥスは当初の構想がイングランド王宮の人々の怒りを招く危険性に気付き、第3部の執筆・発表は時期尚早と判断した。そこで、彼は第3部の序文で筆を止め、その後も書き継がれることはなかった。

なお、ギラルドゥスは『アイルランド征服』をその第1序文で3部構成と紹介しているが⁽²⁴⁾、これは執筆開始時の構想を記しているものであり、実際に第3部まで完成したと言っているのではない。

次に、第2の手掛かりである第1部、第2部の預言はどのような内容で、どのように利用されているのか、いくつか事例を挙げて確認しよう。

(8-3) リチャード・フィッツギルバートはアイルランド遠征に参加するため南ウェー

ルズで兵を集め、準備と整えてからウォーターフォードへ渡った。

「こうして『松明が燃える積み薪を先導し、ちょうど火花が松明に点火するように、松明が積み薪に火をつけるだろう』というセリドン (Celidon) のマーリンの[預言]が実現した。同様に、アイルランドのモリング (Moling) の預言『偉大な人物がやって来るが、彼はより偉大な人の先触れである』[も実現した⁽²⁵⁾。]」

(8-4) 1172年にヘンリ二世はアイルランドへ向けて出発し、南西ウェールズのセント・デイヴィズ教会で遠征の準備を整えた。風待ちの後500人に騎士と多数の射手を率いてウォーターフォードに上陸した。こうしてマーリン・シルヴェスターの有名な預言『『東方に火の玉が昇り、空中で回転してアイルランドを飲み込むだろう』が実現した。また、アイルランドのモリングの『東方から強烈なつむじ風が襲うだろう。その嵐は西に進みヘリモンのオークをなぎ倒すだろう』という預言[が実現した⁽²⁶⁾。]」

(8-5) ヘンリ二世は軍を率いてダブリンに入城し、アルスターを除く各地のアイルランド人支配者たちから臣従の礼を受けた。

「こうして有名なアイルランドのモリングの『[アイルランドの]君主たちは彼の前にひれ伏し、和平[を約束する]ふりをして、彼の愛顧を得ようとする』[という預言]、および、『この島の鳥は[闇の中の]灯火である彼のもとに集まり、その中でも大きな鳥は炎で翼を焼かれて地面に落ち、捕えられるであろう』というマーリン・シルヴェスターの言葉が現実のものとなった⁽²⁷⁾。」

(8-6) ヘンリ二世はウィリアム・フィッツオルデリンとジョン・ド・ケイシーにアイルランド統治を委ねたが、前者は王のために尽力する様子がなかった。そこでウィリアムに仕えていたジョンは独断で少数の軍勢を集め、アルスターに侵入した。

こうしてセリドンのマーリンの有名な預言『『白い騎士が白馬に乗り、鳥の模様の盾を手にして進軍し、アルスターに侵入するだろう』』が実現した。というのも、ジョンの髪は白みがかった金髪で、白馬に載って鷲の模様の盾を手にしていたからである⁽²⁸⁾。

上記の預言について必要と思われる説明をしておこう。

ギラルドゥスの理解では、(8-3)の「松明」と「偉大な人物」がリチャード・フィッツギルバートを指し、「積み薪」と「もっと偉大な人」はヘンリ二世を指している。また、「積み薪」と訳した *rogus* は主として火葬用の薪を意味し、ここではアイルランドの滅亡を暗示している。アイルランドの征服はまずリチャードが先陣を勤め、これを引き継いで王が完成するというのである。こうした2段階での征服はイングランド、フランスを往復する多忙な生活を送っていたヘンリ二世にとって自然な発想であり、ギラルドゥスも同様

に考えていたのであろう。前節で紹介したようにギラルドゥスは、王が征服の途を開いた功労者リチャードを不当に処遇したと批判しているが、王のイニシヤティヴによる征服そのものは一貫して支持していた。全体として (8-3) は王のアイルランド征服が古い預言者たちによって予告されている大事業であって、いつの日か必ず実現するはずであるというメッセージになっている。

同様な意味を (8-4) ももっている。東方の「火の玉」や「つむじ風」がイングランド軍を指し、「アイルランドを呑み込む」や「オークをなぎ倒す」がアイルランドの征服を意味することは間違いない。なお「ヘリモン」はアイルランドの別称である。

ギラルドゥスは古い預言をどのように利用しているのか、4 事例から分かる点を挙げておこう。

- (1) 預言はアイルランド遠征の重要なポイントで引用され、上記の説明からも分かるようにその時の行動や判断が正しかったことを証明する役割を果たしている⁽²⁹⁾。
- (2) マーリン・シルヴェスター、セリドンのマーリン、アイルランドのモリングの言葉が、預言者の出身地と無関係にアイルランド征服と結び付けられている。
- (3) いずれの預言も肯定的に用いられている。すなわち、征服の過程はもっぱらイングランド側から描かれているのであるが、預言も征服者の行動は当然であったと誇示する役割を負わされている。

残念なことに、以上のように整理してみても第1部、第2部の預言から具体的に第3部の構想を推定することはできない。新しい部を設けようとしていたのであるから、ギラルドゥスは第1、第2部とは違った預言の位置づけを考えていたはずで、それはどのようなものか4事例は教えてくれない。

むしろ本稿にとって重要なのは、ギラルドゥスがなぜ第3部の構想を放棄したのかである。この点について彼は、(8-2) で「真実は、それが大いに望ましいことであっても、まだ機が熟していない時に危険を冒して発表し、権力をもつ人々を立腹させるよりも、一時期隠しておくほうがより良い[結果をもたらす]」からである、と述べている。この文章で彼は何を伝えたかったのか、推測してみよう。

最も重要なのは「権力をもつ人々」とは誰かである。この文章の主語はギラルドゥスであるから、彼は自分に大きな影響力をもつ人々の立腹を恐れていたことになり、そこから自然に推定されるのは主君ヘンリ二世を中心とする王宮の人々である。とすれば、なぜ新しく発見された預言を翻訳し、これをアイルランド征服と関連付ける作業が彼らの怒りを招くのであろうか。第1、第2部では予言はもっぱらアイルランド征服とその立役者たちを称え、彼らの行動の正当性を保証するために用いられている。同様な利用法を採れば「権力をもつ人々」の怒りを心配する必要はないはずである。

しかし、一般的に言って、預言は必ずしも現在の権力者に有利なことを伝えているわけではない。逆に被征服者が現状からの脱出を夢見て預言を口にし、伝えてゆく場合がしばしば見られる。第1、第2部とは逆の立場で預言に言及することができるのである。

こうした預言のあり方をギラルドゥスが知らなかったわけではない。それは第1部第28章に記されている次の記述から明らかである。

(8-7) ヘンリ二世はアイルランドの征服地を巡行して統治の体制を作った後、帰国の途中に南西ウェールズのセント・デイヴィズ教会を訪れた。王が巡礼者の姿で教会に近づいた時に、ウェールズ人女性が王の前に身を投げ出し、この地の司教に関する苦情を訴えた。王がはかばかしい返事をしないのを見て、その女性は手を打ちながらウェールズ語で叫んだ。「レフラヴァル[橋]よ、今日こそ敵を討て。我々の一族と血縁者たちのためにこの男に復讐せよ」と。周囲のウェールズ語を解する者は彼女を取り押さえて、やめさせようとしたが、彼女は叫び続けた。「彼女はウェールズ人の間で広まっていたマーリンの預言について叫んでいたのであるが、これは真実というよりも、むしろ虚偽である。」マーリンの預言はアイルランドを征服したイングランド王が同地で赤い手をもつ男に傷つけられ、帰途の途中レフラヴァルで死ぬと告げていたのである。

ヘンリ二世はこの預言を聞き知っていたが、勇敢にもこの石橋を渡り、怒りを込めて次のように言った。「以後誰がうそつきのマーリンを信用するだろうか⁽³⁰⁾。」

ギラルドゥスはここでこれまで紹介した事例とは違った方法でマーリンの預言を利用している。第1に、預言を口にしたのはギラルドゥス自身ではなく、その場にいたウェールズ人女性である。したがって、(8-7) はひとつの出来事を単に紹介しているだけで、他の預言と同列に扱わないほうがよいのかもしれない。第2に、預言の信ぴょう性についてギラルドゥスはこれまでとは逆の立場をとっている。この預言は信頼できないというのである。

本稿にとって最も重要なのは、ギラルドゥスが預言はそれを利用する人によって、また、それが適用される人々に応じて正反対の機能を発揮することをよく承知していたという点である。よく承知したうえで彼はマーリンの預言を、(8-3) ～ (8-6) では自分の目的に合わせて、すなわち、イングランド王権によるアイルランド征服が正当であり、運命づけられた事業であると主張するために利用しているのである。

そのギラルドゥスが第3部でいよいよ構想を実現しようという時点で突然中止したのはなぜか。彼自身は権力者の不興を買いたくないという理由を挙げているので、この点を中心に推測してみよう。

第3部では彼が新しく発見したマーリン・シルヴェスターの預言が中核となって記述が

進められるはずであった。

- (1) この預言の書はウェールズ北西端の、したがって、12世紀末でもウェールズ人勢力下にあり、その古い伝統を保持していた地域で発見されているので、ウェールズ人が自分たちの将来を知る手掛かりとして大切にしていたものである可能性が高い。
- (2) とすれば、そこには、アングロ・サクソンの侵略によって追い詰められたウェールズ人がいつの日か侵入者を排除し、ブリテン島全体の支配者になるという夢を語る預言であった可能性が高い。ウェールズでは今日までこうした預言が伝えられている。
- (3) 預言がウェールズ人に夢を与え、勇気を鼓舞する内容をもっているならば、それをイングランド王国のアイルランド征服に権威付けとして使うのは難しくなる。ウェールズとアイルランドという地域差もあるが、何よりも誰のための預言なのかという方向性が逆になっているからである。
- (4) (8-7) の記述から判断して、第3部を書き始めようとした時にギラルドゥスは上の点に気づいていた可能性が高い⁽³¹⁾。おそらく彼はどうかして新しく手に入れた預言をアイルランド征服に適用するすべがないか検討したと思われるが、彼の文才をもってしても無理のない方法を発見できなかったのだろう。
- (5) 無理に新しい預言の書を利用すれば、イングランド王宮にはマーリンの預言を知っている者がいたろうから、矛盾を突かれる危険がある。これを知ればヘンリ二世は立腹するに違いない。王の認識を改めようと努力している時に、自分に対する疑念を呼び覚ますようなことは避けるべきである。

以上のように考えを巡らせた結果ギラルドゥスは第3部の本文執筆を断念した。そう私は推測している。

研究者の中には、ギラルドゥスが断念したのは彼がマーリンらの預言を信賴していなかったからだと推測する人もいる⁽³²⁾。確かに彼はレフラヴァルの預言について、これは偽りであると述べている。しかし、(8-7) の目的はヘンリ二世の勇気、支配者としての度量を称えることにあり、そうした場面を離れても彼が一般的に古い預言を信用していなかったと断定できない。逆に彼はギルダス (Gildas) の預言ないし警告を大変重要視しているし⁽³³⁾、そもそも預言の力を信じていなければ第3部の構想も生まれなかったはずである。

本節は、史料状況もあって積極的な結論を導き出すことができなかったが、ひとつ確実なのは、彼が『アイルランド征服』発表時でも依然として主君ヘンリ二世の自分に対する評価を大いに気にしていたという点であり、これは本稿にとって重要な意味をもつ。

Ⅸ おわりに

本節では、これまでの検討結果を踏まえて、『アイルランド征服』に込められたギラルドゥスの意図が同書の構想・執筆時に彼がとっていた政治的スタンスとどのように関係しているか推測してみよう。

まず、第4～第8章の議論から彼の政治的スタンスを探るのに役立つと思われる点を挙げる。

第8節では、第3部序文で彼が本文執筆を中止する理由として、構想どおりに書きあげたならば、その内容はイングランド王宮の人々を立腹させるだろうと言っている点が重要である。彼がイングランド王宮の自著に対する評価を大変気にしていたことはまず間違いない。

第4～第7節で検討したギラルドゥスの主張は次の6点に整理できる。①ヘンリ二世のアイルランド征服は神も認める正当な事業である。②アイルランド人・社会は野蛮な水準にあり、外からの力で改めるほかない。③アイルランド征服を計画し、統括したヘンリ二世は優れた支配者である。④第1回征服の前半期に活躍したウェールズ出身のノルマン戦士たちはすばらしい勇気と能力を発揮し、ヘンリ二世に大きな戦果をもたらした。⑤他方、後半期に王がアイルランド総督として送り込んだ家臣たちは、王国の利益よりも私利を追求した。⑥現地をよく知る前半期の功労者たちを退けて、現地に疎い腹心を起用した王の政策は誤りであり、アイルランド征服が長引くひとつの原因となった。

6点のうちで、①～④は征服やその主体を称えるという点で同じ方向性をもっている。それに対して、⑤、⑥はヘンリ二世の政策を、部分的にはあるが批判している。ギラルドゥスは征服そのものを称賛しながら、王は前半期の功労者たちにアイルランド統治を委ねるべきであったと批判している。なぜ彼はこのような矛盾しかねない記述をしたのか、また、こうした記述は彼が当時とっていた政治的スタンスとどのようにかわるのか。

この疑問を解くためには、ギラルドゥスの政治的スタンスを彼の前半生、特に彼が生涯目標達成のために重ねていたさまざまな努力の中に置いてみる必要がある。ただし、ギラルドゥスの生涯目標については先行拙稿で検討を重ねてきたので、ここではその要旨を紹介するにとどめる。

ギラルドゥスは1145年なし46年に南西ウェールズ、マノルビエの城主の子として生まれた。父は12世紀前半に行われたウェールズ遠征に参加し、征服地の管理を委ねられたノルマン貴族、母は南ウェールズの古い王家の血を引いていた。したがって、彼の出自は

南ウェールズの支配をめぐってしばしば対立、抗争していた2つの勢力にまたがっていたわけで、この出自の二元性が彼の生涯、特に彼の政治的スタンスに大きな影響を与えることになる。

しかし、ギラルドゥスは基本的にノルマン貴族の子弟として育てられ、教育された。当時の南ウェールズではイングランド勢力が征服者としての優位性を保ち、そのひとりである父のもとで生活していたのであるから当然であろう⁽³⁴⁾。

ギラルドゥスは早くから文芸の才能を発揮し、聖職者に憧れていたという。南ウェールズ聖界の中心になっていたのがセント・デイヴィズ教会であり、伯父デイヴィッドがその司教であったことも手伝って、彼はこの教会での栄達を目指した。

グロスターで基礎的な学習を済ませた彼は1165年にパリに留学した。10年に及ぶパリでの研さんの後1174年から聖職者・文筆家の途を歩み始めたが、その際まず彼が選んだのは、古い慣習のままに世俗領主が大きな権限をもっていた故郷の教会をローマ教会にならって改革する仕事であった。当時イングランド王権はウェールズ各地の司教座教会を支配下に治めようとしていたこともあり、ギラルドゥスはカンタベリー大司教の代理という資格を取得してこの仕事に取り組んだ。その結果、彼はセント・デイヴィズ教会の主要メンバーから高い評価を得、また、イングランド王宮からも信頼される存在となった。彼の出自の二元性がプラスに作用したわけで、前途は明るかった。1176年に伯父デイヴィッドが死去し、セント・デイヴィズ教会で新しい司教選出の手続きが開始された時には、彼が最も有力な候補とみなされており、司教就任は間違いないように見えた⁽³⁵⁾。

ところが、イングランド王国の司教任命権をもつヘンリ二世は、候補選出手続きに不備があったとして、彼の司教就任を認めなかった。加えて、王が彼を拒否した真の理由はほかにあり、南ウェールズで期待を集めているギラルドゥスが同地の聖界最高位に着くと、彼はウェールズ人支配者たちと結託してこの地域の聖・俗界を掌握するのではないかと危惧したからであることが分かった。ギラルドゥス自身は王にそむく意志をもっていなかったが、血統の四分の一で南ウェールズ王家につながっていること、ウェールズ人支配者たちと直接交渉する力を有することは事実であって、王の危惧を払拭するのは難しかった。

しかし、ギラルドゥスはセント・デイヴィズ司教になるという生涯目標を断念するつもりはなかった。そこで彼は、最高決定権をもつ王の危惧をただ否定するのではなく、自分が王の忠実かつ有能な従者であることを誇示してこの隘路をくぐり抜けようとした。これまではイングランド王権とウェールズ人勢力との間に立って、双方の利益を図る仕事をしてきたのであるが、以後はもっぱら王権の利益のために働き、その結果がウェールズ側に不利となってもこれを無視する方針を立てた。彼は生来の二元性がもたらすメリットをあえて放棄したのである⁽³⁶⁾。

ヘンリ二世は、ギラルドゥスのこうした決意をどこまで知っていたのか不明であるが、彼に疑いの目を向ける一方で、これまで同様に彼がもっている人間関係をウェールズ政策に役立てようとした。1184年に王は彼を王宮付き司祭に任命したが、その後5年間に2つの大きな任務、それも、ウェールズ人支配者たちの彼に対する信頼を危うくするような任務を命じている。

ひとつは1185年に行われた第2回アイルランド遠征で、彼は王の代理として全軍を率いた王子ジョンに随行し、補佐役を務めた。この仕事は、王の側から見れば、日ごろ王宮で直接自分に仕えていて、しかも、第1回遠征後アイルランドに定着していたノルマン貴族たちと交流しているギラルドゥスに委ねてもおかしくない。むしろ自然である。しかし、アイルランドのノルマン領主たちから見れば、征服後四半世紀を経て自立的権力を確保しかけている時に王子を先頭とする軍隊が来島し、王のアイルランド支配権を改めて確認するのであるから、主君の軍隊とはいえ、内心では歓迎できない事件であった。また、彼らは第1回遠征で大きな戦果を挙げたにもかかわらず、その後のアイルランド統治では軽視されたという不満をもっていた⁽³⁷⁾。彼らの中に血縁者であるギラルドゥスが王に状況改善を働きかけてくれるのではないかという期待を寄せる者がいてもおかしくない。そうした立場からすれば、王の命令とは言え、王子の軍隊に随行するというギラルドゥスの行動は理解しがたく、信頼関係を損ねるものと見えたであろう。

こうした政治的状況をギラルドゥスは知っていたはずであるが、それでも彼は王子の遠征を熱心に補佐した。ノルマン貴族たちの自分に対する評価が崩れることを承知の上で、王への忠実ぶりを見せたのである。

もうひとつは、1188年に十字軍勸奨のためウェールズを訪れたカンタベリー大司教ボードウィン案内した巡行である。この当時ウェールズ教会の中では、イングランド聖界の頂点に立つ大司教がミサを主宰すれば、その教会は大司教の権威に服したことになる、自立性を失うと考えられていた。彼はこの危惧をよく承知しながら積極的に任務を遂行している。また、彼は同行した大司教が自分をどのように評価するのか気にしていて、『自叙伝』の中で、大司教がギラルドゥスはもっと高位の聖職者になる実力を備えていると述べたことをわざわざ紹介している。大司教のとりなしで王の自分に対する評価や判断が変わることを期待していたのであろう。ここでも彼は生来の二元性を捨て、王の愛顧を求めている⁽³⁸⁾。

『アイルランド地誌』、『アイルランド征服』が構想・執筆されたのは、ギラルドゥスが職務だけでなく意識の面でもヘンリ二世に接近していた時期であった。当然このスタンスは2つの著作に強く反映している。両書が共通して強調しているのは、ヘンリ二世にはアイルランドを征服し、支配する権利があり、王の征服計画は優れているという点である。

彼の強調ぶりを見ると、両書は王のアイルランド征服を称えるために書かれたのではないかという印象すら受ける。執筆意図とスタンスが調和している。彼は王に直接仕えていたのであるからこれは当然という判断もあるだろうが、これまで彼が出自に根差す二元性を生かして政治的職務を遂行してきたこと、また、後半生期にイングランド王宮と激しい論争を繰り返したことを考えると、王への傾倒は決して自然なものではなく、意図的に選択されたスタンスであろう。

では、『アイルランド征服』で新しく出現した王への批判、すなわち、ヘンリ二世によって冷遇されたウェールズ出身のノルマン戦士たちを称える一方、彼らを押しのけるようにして総督に任命された王の腹心を酷評するという対照的な構成は、当時彼が採っていた政治的スタンスとどのような関係をもっていたのであろうか。以前の二元的姿勢が復活したようにも見えるが、その背景にどのような状況変化があったのか。以下私の推測を記しておこう。

まず、出発点として、リチャード・フィッツギルバートなど「ジェラルド一族」の称賛は第2部に集中していること、また、第2部序文でギラルドゥスが、以後記述の仕方を変えんと言っていることを確認しておこう。

第2部序文で彼は、現在十字軍勸奨巡行の準備に追われており、出発前に第2部の叙述を終えたいと述べている。巡行は1188年3月にスタートしているので、第2部の執筆が始まったのはおそらく1187年の秋か冬であろう。『アイルランド征服』が発表されたのは1189年の前半と推定されている。この年7月にヘンリ二世が死去し、リチャード一世が後を継いだ。同書は基本的にヘンリの在位を前提とした書き方になっているからである⁽³⁹⁾。とすれば、探究すべき点はこの1年半ないし2年の間にギラルドゥスの政治的スタンスに影響を及ぼすような事件や状況変化がなかったかどうかである。さらに範囲を絞れば、彼が自分の姿勢を誇示してきた相手であるヘンリ二世の身边に生まれた新しい動きに注目するのがよい。

晩年のヘンリ二世はいくつもの問題を抱えていたが、特に深刻な打撃を与えたのは息子たちの反逆で、1188年には息子たちがフランス王と手を結んで父と戦うという深刻な状況が生まれた。ギラルドゥスも王にとって息子たちの反逆が最大の不幸であったと繰り返し述べている。また、この時期に王の命運が急速に衰えたと言及し、その原因は王がエルサレム総大司教の十字軍派遣要請に直ちに応じなかったことにあると言っている⁽⁴⁰⁾。

以上から、『アイルランド征服』第2部の執筆時にギラルドゥスのヘンリ二世に対する評価が低下していたことは間違いない。彼にとって最大の後ろ盾であったヘンリ二世、その認識を変えるために自分の政治的スタンスのバランスを崩すことまでした主君の勢いが衰えてきたのであるから、一方的に王に尽くすこれまでの姿勢を改め、出自に根差す自然

な政治的スタンスに戻ろうとする気持ちが生じるのは自然である。そのひとつの現われが第2部における暗示的なヘンリ二世批判だったのではないかと私は考える。

ただし、ギラルドゥスは第2部執筆以前から王の人材起用について批判的な気持ちをもっていた。第1回アイルランド遠征におけるヘンリの人材起用は誤りであったという判断は彼が遠征に関する情報を本格的に集め始めた時に生まれた可能性が高い。加えて、前節で述べた私の推測、すなわち、ギラルドゥスは王の自分に対する処遇とリチャード・フィッツギルバートらへの処遇とを重ね合わせて考えていたとするならば、王に対する批判的感情はさらに以前までさかのぼる。そうした気持ちだが、暗示的にはあるが、『アイルランド征服』第2部の執筆時に初めて表出されたのである。

しかし、この段階ではギラルドゥスはまだ慎重だった。ヘンリ二世を直接批判する表現は避け、複数の要素を組み合わせて読むと批判だと分かる書き方をしている。第3部の序言に記されている彼の配慮、すなわち、イングランド王国の支配者たちの不興を買ってはならないという判断は『アイルランド征服』全体を強く規制していたのである。

註(Ⅱ)

<第6節>

- (1) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 86~89.

Vir liberalis et lenis. Quod re non poterat, verborum suavitate componebat.

- (2) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 152~55.

Ut autem viri virtutes, mores et modos sub brevitate concludam, vir erat liberalis et lenis, providus et prudens.

- (3) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 172~73.

Et quamquam auri cupidus et culialiter ambiciosus, non minus tam curiam diligens quam aurum.

- (4) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 192~93.

Vir auri cupidus et avarus, propriique honoris et excellencie trans modestiam ambiciosus.

- (5) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 156~59.

・・・tam generis numerositate quam et innata strenuitate semper suspecta, que ad regni cuiuslibet expugnacionem per se sufficeret, si non tantam invidens illis strenuitatem semper in alta livor ab alto descendisset.

- (6) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 166~73.

Qui sunt, qui penetrant hostis penetralia? Giraldide.

Qui sunt, qui patroam coservant? Giraldide.

Qui sunt, quos hostes formidant? Giraldide.

Qui sunt, quos livor detrectat? Giraldide.

- (7) 以下の説明は下記の表に基づいている。

[16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)) の付表 The Children of NESTA.

- (8) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 228~31.

<第7節>

- (9) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 132~35.

・ ・ ・ cursum et breviter, communi quoque sermone non ornato, cuncta de cetero prosequemur, ut posteritati potius materie delibatio quam historie narratio tardi videatur.

キリストの十字架に関する重要な仕事とは十字軍遠征を指す。ギラルドゥスは十字軍参加勸奨のため1188年にカンタベリー大司教とともにウェールズを巡行し、人々に先駆けて参加を申し出ている。

- (10) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 134~35.

Vaticinal Histori.

- (11) 預言に関する記述は第8章でまとめて検討する。

- (12) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 216~17, 232~35

- (13) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. xxxi~xxxii.

- (14) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 200~203, 202~207, 206~209, 208~11, 212~17.

- (15) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 244~49, 248~53.

- (16) 第3部を除外しても『アイルランド征服』がひとつの著作として成り立つことは次節で明らかにする。

- (17) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 156~59, 166~73, 228~31.

- (18) 第6節の史料(6-3)と(6-4)を参照。

- (19) 第38章でも同様な主張が記されている。[16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 244~45.

- (20) 後半生紀に書かれた『自叙伝』にはこうした不満が繰り返されている。そうした箇所をひとつ挙げる。

[5] Giraldus (Brewer, J. S. (ed.)), p. 60. [27] Giraldus (Rutherford, A. (ed., trans.)), p. 40.

<第8節>

- (21) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 252~57.

・ ・ ・ id unde auctoritatem et prescienciam, necnon et vaticinale nomen sortitur historia ・ ・ ・ .

- (22) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 256~57.

Sed hec hactenus. Huius etenim tercie distincionis edicio et nova vaticiniorum interpretacio suum adhuc saniori consilio tempus expectet. Satius est enim ut veritas quamquam perutilis et desiderabilis, aliquamdiu tamen suppressa lateat, quam in lucem cum maiorum affensa prepropere pariter et periculose prorumpat.

- (23) [4] Giraldus Cambrensis (Dimock, J. F. (ed.)), p. 155. [24] Giraldus Cambrensis (Thorpe, L. (trans.)), p. 211.

- (24) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 10~11.

- (25) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 64~65.

Ignem rogum fax preveniet. Et sicut scintilla facem, sic fax rogum provocabit. veniet magnus, percussor maioris.

- (26) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 92~93.

Ignis ab euro galobus accendet et Hiberniam in circuitu devorabit.

- (27) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 96~97.

Coram ipso procident principes et fucato sub federe pacis amorem consequentur. Ad eius lucernam aves insule convolabunt, et maiores in illis alias accensis, corrueunt in capturam.

- (28) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 174~75.

Miles albus, albo residens equo, aves in clipeo gerens, Ultonaim hostili invasione primus intra-bit.

- (29) たとえば、リチャード・フィッツギルバートが初めてアイルランドに上陸した時、ヘンリ二世が軍隊を率いて上陸した時、ジョン・ド・コースーがダブリンから遠征し、アイルランド西部に進出した時に預言が引用されている。

- (30) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 104~107.

Vindica nos hodie, Lechlavar. Vindica genus et gentem de homine hoc.

- (31) 『アイルランド征服』よりも 5 年後にかかれた『ウェールズ案内』でギラルドゥスは、ウェールズ人の中にはマーリンの予言を信じ、いつか侵入者の支配は終わると夢見ている者がいるが、これは全くの幻想にすぎないと述べている。

[4] Giraldus Cambrensis (Dimock, J. F. (ed.)), p. 216. [24] Giraldus Cambrensis (Thorpe, L. (trans.)), p. 265.

- (32) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. lxiii~lxiv.

- (33) [93] 永井, 第 2 節。

< 第 9 節 >

- (34) [90] 永井, 第 2 節。

- (35) [90] 永井, 第 2 節。

- (36) [90] 永井, 第 3 節。

- (37) 本稿, 第 6, 第 7 節。

- (38) [90] 永井, 第 3 節。

- (39) ギラルドゥスは第 2 序文の中で、リチャードを「高貴なポアトゥ伯・ノルマンディー公にして、近い将来イングランドの支配者になるべき人」と呼んでいる。マーティンはこの表現から、第 2 序文はヘンリ二世の死去（1189 年 7 月 6 日）より後でリチャード一世の即位（1189 年 9 月 1 日）までの間に書かれたのではないかと指定している。ただし、この間は王位継承をめぐる不安定な政治状況が続いており、そうした状況の中で家臣が次王は決まっているかのような表現をすると身の危険を招く可能性がある。ギラルドゥスはこうした点を知っていたはずである。むしろ、リチャードの即位後に、ギラルドゥスが一度書き終えていた第 2 序文に「近い将来イングランドの支配者になるべき人」を挿入し、時間的なずれをカバーしようとした、と推測するのが自然であろう。

- [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 22~23, 285.

Pictavensium comes inclite, Normannorum quoque dux, et Anglorum rector mox future.

- (40) [16] Giraldus Cambrensis (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed. trans.)), pp. 224~25.

参考文献

I 史料

(A) ギラルドゥスの著作と訳本

- [1] Giraldus Cambrensis: Topographia Hibernica (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 5, H. M. S. O., 1867) (『アイルランド地誌』)

- [2] Giraldus Cambrensis: Expugnatio Hibernica (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cam-*

- brensis*, vol. 5, H. M. S. O., 1867) (『アイルランド征服』)
- [3] Giraldus Cambrensis: Itinerarium Kambriae (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1868) (『ウェールズ旅行記』)
- [4] Giraldus Cambrensis: Descriptio Kambriae (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1868) (『ウェールズ案内』)
- [5] Giraldus Cambrensis: De Rebus a se Gestis (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 1, H. M. S. O., 1861.) (『自叙伝』)
- [6] Giraldus Cambrensis: Gemma Ecclesiastica (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 2, H. M. S. O. 1862)
- [7] Giraldus Cambrensis: De Principis Instructione (in Warner, George F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 8, H. M. S. O. 1891)
- [8] Giraldus Cambrensis: Symbolum Electorum (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 1, H. M. S. O., 1861)
- [9] Giraldus Cambrensis: Speculum Ecclesiae (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873)
- [10] Giraldus Cambrensis: De Jure et Statu Menevensis Ecclesiae, Dialogus (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 3, H. M. S. O. 1863) (『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』)
- [11] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Dividis Menevensis Archiepiscopi (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis* vol. 3, H. M. S. O., 1863.) (『セント・デイヴィズ教会大司教聖デイヴィッド伝』)
- [12] Giraldus Cambrensis: De Vita Galfredi Archiepiscopi Eboracensis (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873.) (『ヨーク大司教ジョフレイ伝』)
- [13] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Ethelberti (in [8] Giraldus Cambrensis: Symbolum Electorum)
- [14] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Remigii (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 7, H. M. S. O., 1877)
- [15] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Hugonis (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 7, H. M. S. O., 1877)
- [16] Giraldus Cambrensis, (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed., trans.)): *Expugnatio Hibernica, The Conquest of Ireland*, Royal Irish Academy, 1978. (『アイルランド征服』)
- [17] Giraldus Cambrensis (Davies, W. S. (ed.)): De Invectionibus / The Book of Invectives of Giraldus Cambrensis, *Y Cymmrodor*, vol. xxx, 1920. (『論駁』)
- [18] Giraldus Cambrensis (Lefevre, Y. & Huygens, R. B. C. (eds., trans.)): *Speculum Duorum, or a Mirror of Two Men*, University of Wales Press, 1974. (『二人の鑑』)
- [19] Giraldus Cambrensis: Topography of Ireland (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*), H. G. Bohn, 1863. (『アイルランド地誌』)
- [20] Gerald of Wales, (O' Meara, John (trans.)): *The History and Topography of Ireland*, Penguin Books, 1951. (『アイルランド地誌』)
- [21] ギラルドゥス・カンブレンシス, (有光秀一訳): 『アイルランド地誌』, 青土社, 1996 年。
- [22] Giraldus Cambrensis: The Vaticinal History of the Conquest of Ireland (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus*

- Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863. (『アイルランド征服』)
- [23] Giraldus Cambrensis: The Itinerary through Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863) (『ウェールズ旅行記』)
- [24] Giraldus Cambrensis: The Journey through Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978. (『ウェールズ旅行記』)
- [25] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863) (『ウェールズ案内』)
- [26] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978. (『ウェールズ案内』)
- [27] Giraldus Cambrensis (Rutherford, Anne (ed., trans.)): “*I, Giraldus*”, *The Autobiography of Giraldus Cambrensis (1145~1223)*, Rhwymbooks, 2002. (『自叙伝』)

II 研究文献

- [28] Babcock, Robert Sherburne: Rule and Society in South-West Wales, 1079~1197, 1992, Doctorial Dissertation submitted to University of California, Santa Barbara.
- [29] Bartlett, Robert: *Gerald of Wales, 1146~1223*, Clarendon Press, 1982.
- [30] Bartlett, Robert: Heartland and Border, the Mental and Physical Geography of Medieval Europe (in [61])
- [31] Brooke, Christopher N. L.: The Archbishops of St. David's, Llandaff and Caerleon on Usk. (in [32]).
- [32] Brooke, Christopher N. L.: *The Church and the Welsh Border in the Central Middle Ages*, The Boydell Press, 1986.
- [33] Charles-Edwards, T. M.: Seven Bishop-Houses of Dyfed, *Bulletin of the Board of Celtic Studies*, vol. 24-2, 1971.
- [34] Clarke, Henry William: *A History of the Church of Wales*, Swan Sonnenschein, 1896.
- [35] Davies, J. Conway: Giraldus Cambernsis and Powys, *Montgomeryshire Collections*, vol. 49, 1945/46
- [36] Davies, J. Reuben: Aspects of Church Reform in Wales, c. 1093~c. 1223, *Anglo-Norman Studies*, vol. 30, 2007.
- [37] Davies, R. R.: *Conquest, Coexistence, and Change. Wales 1063~1415*, University of Wales Press, 1987.
- [38] De Hirsch-Davies, John Edwin: *A Popular History of the Church in Wales, from the Beginning to the Present Day*, Isaac Pitman, 1912.
- [39] Edwards, Alfred George: *Landmarks in the History of the Welsh Church*, John Murray, 1912.
- [40] Edward, Fiona & Russell, Paul (eds.): *Tome, Studies in Medieval Celtic History and Law, in honour of Thomas Charles-Edwards*, Boydell Press, 2011.
- [41] Evans, H. Wyn: The Bishops of St. David's from Bernard to Bec. (in [76]).
- [42] Evans, J. Wyn & Wooding, Jonathan M. (eds.): *St. David of Wales, Cult, Church and Nation*, Boydel Press, 2007.

- [43] Evans, J. Wyn: Transition and Survival, St. David and St. David's Cathedral. (in [42]).
- [44] Holmes, Urban T. : The Kambriae Descriptio of Gerald the Welshman, *Medievalia et Humanistica*, new series, vol. I, 1970.
- [45] Hughes, Herbert: Giraldus de Barri: An Early Ambassador for Wales, *Brycheihiog*, vol. XXXVIII, 2006.
- [46] Hurlock, Kathryn: *Wales and the Crusades, c 1095~1291*, University of Wales Press, 2011.
- [47] Isaac, G. R. : The Cult of St. David. (in [42]).
- [48] Jones, Thomas: *Gerallt Gymro, Gerald The Welshman*, University of Wales Press, 1947.
- [49] Jones, Thomas: Gerald the Welshman's "Itinerary through Wales" and "Description of Wales", *The National Library of Wales Journal*, vol. VI, no. 3, 1950.
- [50] Kightly, Charles: A Mirror of Medieval Wales, Gerald of Wales and his Journey of 1188. Cadw, 1988. (和訳書 [84])
- [51] King, David & Kenyon, John: The Castles of Pembrokeshire. (in [76]).
- [52] Lieberman, Max: *The March of Wales, 1067~1300, A Borderland of Medieval Britain*, University of Wales Press, 2008.
- [53] Lloyd, John Edward: *A History of Wales, from the Earliest Times to the Edwardian Conquest*, 2 vols., Longmans, Green, 1912.
- [54] Marsden, Richard: Gerald of Wales and Competing Interpretations of the Welsh Middle Ages, c. 1860~1910. *The Welsh History Review*, vol. 25, no. 3, 2011.
- [55] Miles, John: *Gerald of Wales, Giraldus Cambrensis*, Gomer Press, 1974.
- [56] Newell, E. J. : *A History of the Welsh Church to the Dissolution of the Monasteries*, Elliot Stock, 1895.
- [57] Owen, Henry: *Gerald the Welshman*, David Nutt, 1904.
- [58] Owen, W. Jones & Walker, David (eds.): *Links with the Past, Swansea and Brecon Historical Essays*, Christopher Davies, 1974.
- [59] Pitts, David: *The Early Medieval Church in Wales*, History Press, 2009.
- [60] Pryce, Huw: In Search of Medieval Society: Deheubarth in the Writings of Gerald of Wales, *The Welsh History Review*, vol. 13, no. 3, 1987.
- [61] Pryce, H. & Watts, J. (eds.): *Power and Identity in the Middle Ages, Essays in Memory of Rees Davies*, Oxford University Press, 2007
- [62] Pryce, Huw: Gerald of Wales and the Descriptio Kambriae. (in [40])
- [63] Rees, J. F. : *Studies in Welsh History, Collected Papers, Lectures, and Reviews*, University of Wales Press, 1965.
- [64] Rhys, John & Brynmor-Jones, David: *The Welsh People, Chapters on their Origin, History and Laws, Language, Literature and Characteristics*, Haskell House Publishers, 1906.
- [65] Richter, Michael: *Giraldus Cambrensis, the Growth of the Welsh Nation*, Aberystwyth, 1972.
- [66] Richter, Michael: Gerald of Wales: A Reassessment on the 750 th Anniversary of his Death, *Traditio*, vol. 29, 1973.
- [67] Sharpe, Richard: What Text is Rhigyfarch's Life of St. David? (in [42])
- [68] Sharpe, Richard & Davies, John Reuben: Rhigyfarch's Life of St. David. (in [42])
- [69] Stephenson, David: *Medieval Powys, Kingdom, Principality and Lordships, 1132~1293*, Boydell Press, 2016.

- [70] Stephens, Meic (ed.): *The New Companion to the Literature of Wales*, University of Wales Press, 1988.
- [71] Turvey, Roger: *The Lord Rhys, Prince of Deheubarth*, Gomer, 1997.
- [72] Turvey, Roger: *The Welsh Princes, 1063~1283*, Longman, 2002.
- [73] Wada, Yoko: Gerald on Gerald, Self-Presentation by Giraldus Cambrensis, *Anglo-Norman Studies*, vol. 20, 1998.
- [74] Walker, David: Gerald of Wales, Archdeacon of Brecon. (in [58])
- [75] Walker, David (ed.): *A History of the Church in Wales*, Church in Wales Publications, 1976. (和訳書 [83])
- [76] Walker, David: Gerald of Wales, *Brycheiniog*, vol. XVIII, 1978-79.
- [77] Walker, R. F. (ed.): *Pembrokeshire County History*, vol. II, Pembrokeshire Historical Society, 2002.
- [78] Walker, R. F.: The Earls of Pembrokeshire, 1138~1379. (in [76]).
- [79] Williams, A. H.: *An Introduction to the History of Wales*, 2 vols., University of Wales Press, 1941 & 1948.
- [80] Williams, C. H.: Giraldus Cambrensis and Wales, *Journal of the Historical society of the Church in Wales*, no. 2, 1947.
- [81] Williams, Glanmor: The Tradition of St. David's in Wales. (in [58])
- [82] Wooding, Jonathan M.: The Figure of David. (in [58])

- [83] 有光秀行『中世ブリテン諸島史ーネイション意識の諸相』刀水書房 2013 年。
- [84] D. ウォーカー(編)(木下智雄(訳)):『ウェールズ教会史』, 教文館, 2009 年。
- [85] C. カイトリー(和田葉子(訳)):『中世ウェールズをゆくージェラルド・オヴ・ウェールズ 1188 年の旅』, 関西大学出版部, 1999 年。
- [86] 永井一郎「ノルマン侵入後のウェールズー独立をかけた戦い」(青山吉信 編著『世界歴史大系 イギリス史 I 先史~中世』, 山川出版社, 1991 年)。
- [87] 永井一郎「『ウェールズ案内』におけるギラルドゥス・カンブレシスの二元性」, 『国学院経済学』第 57 巻 3・4 号, 2009 年。
- [88] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスと 12 世紀南ウェールズの政治世界(I), (II)」『国学院経済学』第 59 巻 1 号, 2010 年, 第 59 巻 2 号, 2011 年。
- [89] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスの自己認識とウェールズ評価(I), (II)」『国学院経済学』第 59 巻 3・4 号, 2011 年, 第 60 巻 2 号, 2012 年。
- [90] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスのキャリア・デザイン(I), (II)」『国学院経済学』第 62 巻 2 号, 2014 年。第 62 巻 3 号, 2014 年。
- [91] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスとセント・デイヴィズ問題(I), (II), (III)」『国学院経済学』第 63 巻 1 号, 2014 年, 第 63 巻 3・4 号, 2015 年, 第 64 巻 1 号, 2015 年。
- [92] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスと『ブレコン大助祭問題』(I), (II)」『国学院経済学』第 64 巻 2 号, 2015 年, 第 64 巻 3 号, 2016 年。
- [93] 永井一郎「『ウェールズ案内』を読み直すー著者ギラルドゥスの執筆意図を手がかりに」『国学院経済学』第 65 巻 1 号, 2016 年, 第 65 巻 2 号, 2017 年。
- [94] 永井一郎「『アイルランド地誌』を読み直すーギラルドゥス・カンブレシスの執筆意図にかかわらせて」『国学院経済学』第 66 巻 2 号, 2017 年。

ヘンリ二世の第1回アイルランド遠征

----- 1169年の遠征

- . - . - 1170年 リチャード・フィッツギルバートの遠征

———— 1172年 ヘンリ二世の遠征



John Haywood: The Historical Atlas of the Celtic World, 2001, p.115 を参照した。

